

# 「○△□茶会」ユニバーサル茶会における 茶碗のデザイン制作

Development of Tea Bowl Design for Universal Tea Ceremony

池田 晶一  
IKEDA Shoichi



〈写真1〉○△□（まるさんかくしかく）茶碗

## 1. はじめに

1997年10月22日、鈴木大拙館（金沢市）にて「○△□茶会」ユニバーサル茶会が開催された。

「○△□茶会」は、金沢21世紀工芸祭 金沢みらい茶会の7企画の内の1つとして開催されたもので、一般社団法人ユニバーサルデザインいしかわ（以下、UDI）が企画を行った。

私は、この茶会の為の茶碗づくりを依頼され、企画者を含み、障がい者と共に、ユニバーサル茶会とは何か？また、その茶会の為の茶碗はどのようなものなのか？を模索し、茶碗開発プロジェクトを進めた。

本論は、茶碗開発プロジェクトで試行錯誤しつつ茶碗を開発して行った手法を読み取りながら、新たな工芸的デザインの開発の方法、もしくはデザイン

のあり方の多様性を示し述べてゆくものである。

デザインとはデザイナーとユーザーの関係で、もしくは複数の開発者等の間でなされてゆくものである。しかし今回の取り組みは、工芸的な視点から手で素材を触りながら、関わる人達とそれを確かめつつ進めて来たもので、経験と技術、素材の理解を中心に成し得たものであると言える。

デザインのプロセスの順を追って見てゆくと共に、その意義を論じてゆきたい。

## 2. 茶碗開発プロジェクトのプロセス

### (1) ユニバーサル茶会 関係者打合せ 〈2017.8.4〉

最初に、この日初めて茶会に関係するメンバーが集まった。参加者はUDIスタッフ4名と障がい者4名と私の9名。

どのような方法で茶碗を開発してゆくのか、既存の茶碗でお茶を頂きながら、議論を進めた。

この企画の中では、どのように茶碗制作を進めるのかさえもフリーハンドであった為、実際に障がい者と一緒にお茶を飲みながら、障がい者のそれぞれの方がどのようにお茶を飲むのか、その所作の観察から始まった。

障がいを持たれている参加者は以下4名。

**Aさん（女性）**：頸椎損傷、体を支えることが出来ず車椅子を使用、手が上手く握れない。

**Bさん（男性）**：頸椎損傷、体を支えることが出来ず車椅子を使用、手が上手く握れない。（Aさんと同じ様な症状であるが、体格の違いや手を動かす動作に違いがある。）

**Cさん（女性）**：弱視（視野の極中央しか見えない。）

**Dさん（女性）**：全盲



〈写真2〉既存の茶碗の検証

この日、色々な所作を観察し、またUDIスタッフとも思案し、一度全員で自身が使う茶碗をイメージし、粘土を用いて制作することを提案した。

それは、全盲のDさんが陶芸教室で茶碗等の陶芸作品を作られているということ。また、それぞれの参加者が自身の手の中で何か形を作りたいという思いを感じ取ったところから考えた事である。

この段階では、どの様なものを作ることが出来るのかは想像することさえ出来なかった。まずは、粘土を触りそこから見えて来るモノの中で思案することとした。

## (2) 茶碗開発プロジェクト 茶碗制作ワークショップ 〈2017.8.23〉（午前2時間）

この日は、前回参加の障がい者4名と手捻り（手轆轤の上で、紐状の粘土を積みながら成型する方法）で茶碗の制作を行った。

一人を除いては、陶芸体験が初めての為、制作をサポートしつつ作業を行なった。



〈写真3〉茶碗の制作



〈写真4〉成型された茶碗

成型された茶碗は制作者の身体の特徴に合わせ、自らが使用することを第一に制作されている。しかしながら、制作時間が限られた中での作業であった為、器の厚みや裏の高台等の仕上げは出来ず、私の方で引き取り、仕上げることにした。

ただ、仕上げの方法によってはオリジナルの意図が損なわれる恐れがある為、必要最小限の仕上げに留めた。その為、実際に使用するには、少し厚みがあり手に持った感じが重いものになった。

## (3) ワークショップで制作した茶碗を手本にした茶碗の制作

ワークショップの後、作品は裏処理等の後に素焼き、本焼きとなるが、ワークショップを行いながらその茶碗自体を茶会で使用するには難しさを感じた。故に、その作品を手本にし、大きさや形状を似せた茶碗を電動轆轤を使用し作成した。〈写真5〉



〈写真5〉ワークショップの作品を手本にした茶碗

後に予定されている茶会には、10個を超える茶碗が必要であった為、手本となる茶碗を元にバリエーションを増やし、形状や全体のフォルムの異なる茶碗を制作した。

これらの制作で使用した土は、市販の白御影土、赤御影土、古信楽細目である。御影土は土の中にシャモットや色の付いた原材料が混在し、表面にはザラつきが生じる。いわゆる陶器らしさと胡麻が混ざったような風合いが出る。

釉薬は市販の淡緑チタン結晶釉、均窯釉、朱鷲色志野釉、空砂釉と大学で常備している天目釉と鉄茶釉、アメ釉である。これらは釉薬の厚み等によって色の濃さや風合いが異なり面白い表情を見せる釉薬である。

今回のワークショップ、および茶会の為の茶碗制作では、主に器の形状について着目していた為、土の感触や釉薬の表面の状態等に関しては、多様な風合いが出ることのみを意図し、作品の見栄えを考慮した程度で選定した。

土や釉薬の肌触り等に関しては、後の今後の課題の中で詳しく述べる。

#### (4) ワークショップ作品完成お披露目〈2017.9.9〉

ワークショップで制作した茶碗を制作者一同で確認した。

各々に形状、手触りを確かめ、持ちやすさや手触り感等の感想を述べあった。

作品の釉薬に関しては、先の章でも使用した釉薬等について述べたが、それぞれの作品に、表面に光沢のあるツルツルした触感の釉薬、表面がマット状になり、サラサラした手触りの釉薬、釉薬に砂を混入したザラザラ感のある釉薬をランダムに施した。

感想では、ツルツルした触感の釉薬は、手の中で滑りやすく、不安定を感じるということがあった。

茶碗制作そのものの評価ではないが、自らの手の中で作った形が、茶碗として焼きあがったことへの喜びを参加者全員から見る事が出来た。

茶碗制作そのものを私の手の中だけで作り、提案し提供するというのもプロジェクトの途中では考えたが、障がい者や企画者自らが一緒に土を触り、茶会という大きなイベントに向けて取り組めたことは、結果的に良かったのではないかと考えている。



〈写真6〉ワークショップ参加者の制作した茶碗

#### (5) 鈴木大拙館で茶会の打合せ〈2017.9.22〉

茶碗開発プロジェクトからは、内容が広がるが、茶会は鈴木大拙館（金沢市）にて開催した。

鈴木大拙は金沢出身の仏教哲学者で、鈴木大拙館は彼の考えや功績を広める為に作られたもので、館内は展示空間、学習空間、思索空間等からなり、外部の回廊や思索空間からは水鏡の庭〈写真7〉を見

ることが出来る。

計画では、展示空間で作品の展示やレクチャーを行い、思索空間にて茶会を実施してゆく。

企画者のUDIの主導のもと、茶会全体のプログラム、会場での作品のお披露目や展示方法等が検討された。

この茶会では、障がい者の参加も見込まれる為、参加者の身体的特性に沿って、会場内の移動から茶会そのものの運営の詳細を詰めていった。



〈写真7〉 鈴木大拙館 水鏡の庭



〈写真8〉 思索空間内部

#### (6) 茶碗のお披露目 & 菓子検証 〈2017.9.26〉

ワークショップの作品を手本にし、完成した茶碗を披露した。

出来上がった茶碗に関して、各々から感想を述べてもらった。また、実際に茶碗を持ち、茶を飲む所作を観察した。



〈写真9〉 ワークショップ参加者の制作した茶碗(手前)とそれを元にした茶碗(奥)



〈写真10〉 制作した茶碗とその持ち方



〈写真11〉 茶を飲む所作の観察

頸椎損傷のあるAさん・Bさんは、手の動作に制限があり掴む動作が出来ない。その為、平たい茶碗を手手の平の内側に乗せて挟むように固定するが、器の表面全体に釉薬がかかっていると滑りやすく不安があるということであった。

視覚に障害（全盲）のあるCさんは、筒状の茶碗を両手で包むように持つが、この場合も全面にツルツルした釉薬の施してあるものは不安を感じ、高台や、茶碗の下半分に釉薬の掛かっていないザラザラした細かな凹凸の部分があると安心出来るということである。

茶碗の評価は、厳密には行なえていないが、持ち方や茶碗表面の釉薬（肌触り）に関心が集まった。



〈写真12〉所作の観察に用いられた茶菓子

また、茶碗開発プロジェクトと合わせて菓子開発プロジェクトも同時に勧められた。

ここで少し紹介する。

この日、茶席で出す茶菓子について検証が行われた。これは主に、菓子を食べる所作に関する事で、菓子の材料や作り方等を見てゆく中で、実際の動作や食べやすさの検証を行ったものである。

菓子の検討については、吉はし菓子店（金沢市）の協力のもと行われた。

幾つかの種類の菓子を障がい者それぞれに食して頂き、その所作を観察した。また、本人からもそれぞれの菓子についての思い等を語ってもらった。

簡単にまとめれば、和菓子には餡や餅等に様々な材料が用いられるが、餅や餡が二重構造になっているものや、餡がほろほろと崩れやすいものは総じて食べにくいという結果になった。

頸椎に損傷を負っている参加者は、真っ直ぐに体を固定して座ることも難しく、手を握る、摘むといった動作に不自由がある為、楊枝等を上手く扱えない。

視覚に障害（全盲）のある参加者は、菓子自体がどのようなになっているのか判らず、餡が崩れた菓子

を上手く扱えなかったり、皿等の上にどれくらいの量の菓子が残っているのかよく判らないことがあるということであった。また茶会等に参加した場合、菓子を溢してしまうことがあり、自身の動作を他の茶席の参加者に注目されることに、不安を持っておられるとのことであった。

菓子に関しては参考程度にまとめるが、後に揚げる〈写真20〉の菓子が茶会で出された。この菓子は提供する直前にホットプレートで温められ、温かい状態で客に出される。10月末の肌寒い気候の中で温もりを感じてもらう工夫である。また、この菓子は、手で直接持って頂くことが出来る。菓子を頂く所作を周りの人に気遣うことなく頂くことが出来る。また、温度のある柔らかな触感の菓子を指先から直接感じ取り、風味も豊かに感じ取れるものとなっていた。



〈写真13〉茶菓子を頂く所作の観察 テーブル上



〈写真14〉茶菓子を頂く所作の観察 皿を手にとって

### 3. 「〇△□茶会」ユニバーサル茶会 〈2017.10.22〉

鈴木大拙は禅画「〇△□」をThe Universeと訳し西洋に紹介した。

「〇△□茶会」は、〇△□〈The Universe〉をユニバーサルデザインと関連付け、多様性と共生をテーマに、障がい者や高齢者等誰もが参加出来るユニバーサルな茶会を目指したものである。

以下、茶会の様子を紹介する。

茶会では学習空間にワークショップで制作した茶碗を展示した。また、その茶碗を手に持つ様子をスケッチで表し作品と共に展示〈写真15〉した。

茶碗だけを鑑賞するのではなく、その茶碗と茶碗を持つ手との関係、強いては人と道具の関係を感してもらおう為である。

展示会場では、大拙の思想や、茶会の趣旨、展示茶碗のレクチャーを行い、制作者を囲みながらそれぞれに茶碗を手に取り鑑賞した。



〈写真15〉ワークショップで制作された作品とパネル



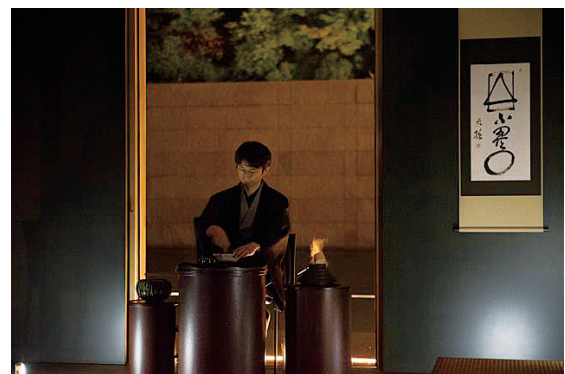
〈写真16〉展示会場での作品鑑賞



〈写真17〉茶会会場 思索空間への移動



〈写真18〉手前の道具



〈写真19〉手前 奈良 宗久氏

茶会当日は、この季節には珍しく台風の為に風雨が激しい中の開催となった。茶会が始まる前までは問題なかったが、茶会に移る直前に茶会会場である思索空間のみが停電となってしまった。電気は復旧せず手元ライトを会場に幾つか配置した暗闇の中での実施となった。

暗闇での茶会の実施は想定外であったが、滞りな

く執り行われた。

暗闇については、突発的な出来ことであったが、茶会の終了後、「暗闇の茶会は演出だと思った。」「暗闇だと周りの人の視線を気にすることなく、お茶を楽しむことが出来た。」といった感想があった。

先の章で、障害を持つ人が菓子を食べる時、菓子を溢してしまう等、その様子を見られることに不安を持っておられる記述をした。しかしこの暗闇はその様な心の壁を取り払う、ユニバーサルな空気を作り出していた。また、視覚だけに頼らずに参加者の様々な感覚を敏感にし、意図せずこの茶会の目指したテーマを超えたユニバーサルのあり方を実現していた様に感じる。

茶碗開発プロジェクトでは、茶碗と人の関係に焦点を当てていたが、茶会を通して新たな課題も感じられた。



〈写真20〉 ○△□茶会の為の温かい茶菓子



〈写真21〉 お茶



〈写真22〉 茶席で使用した茶碗の鑑賞



〈写真23〉 茶席で使用した茶碗

#### 4. 「掴む形」「載せる(挟む)形」「包む形」



〈写真24〉 ○△□ (まるさんかくしかく) 茶碗

ここで一つの結果を得た。

茶会において約20個の茶碗を制作したが、茶会での障害を持たれる客に関してはその特性に合わせた

茶碗を選び、茶を提供した。これは障害のあり様で茶碗によっては上手く茶碗を持ってないこと等を避ける為である。例えば、上手く掴む動作が出来ない方には、手の平の上に乗せる形の平たい形状茶碗を、目の見えない方には手で包み込める様な形状の茶碗を、と言った具合に。

形と動作は関連づけられる。ワークショップの中で障がい者と共に積み重ねの中で、3つの茶碗の形と手の形、「掴む形」「載せる（挟む）形」「包む形」に集約した。

### (1) 「載せる（挟む）形」

〈写真25・26〉は両手に「載せる（挟む）形」として見る事が出来る。茶碗の形の種類で言えば、暑い季節に使用される平茶碗に分類される。これは、茶碗のお披露目時に行ったことであるが、障がい者の作った作品を手本とした茶碗を様々に試してもらった。そこで見えてきたことは、茶碗の胴の部分のわずかな角度の変化が、飲みやすさに繋がっていることである。平茶碗の胴の角度を広げると少し傾けるだけで茶を飲み干す事が出来る。茶碗が深くなればなる程茶碗に角度をつけないと飲み干す事が出来ない。これは、頸椎損傷を持つAさん、Bさん共通に当てはまる。少し詳細な違いを述べると、同じ様な形状の器でも、Aさんは両の手の平に乗せる様〈写真28〉に、Bさんは両の手の平で挟む様に〈写真29〉茶碗を持つ。これらの平茶碗は側面から見ると逆三角形の形になる。



〈写真25〉 載せる形



〈写真26〉 挟む形

### (2) 「包む形」

次に〈写真27・28〉の両手で「包む形」である。これは筒状もしくは丸い碗状の器をしっかりと両手で包み込んで持つ形である。Cさん（弱視）Dさん（全盲）がこの持ち方で器を持つ。視力が弱い、または見えないことで、しっかりと器を持つ形状になっている。茶碗の形状は筒状に近いところに集約され、側面からの形は四角になる。



〈写真27〉 包む形



〈写真28〉 包む形



(3) 「掴む形」

最後に〈写真29〉の「掴む形」であるが、この持ち方は、碗の口の部分に親指をかけ、高台の部分をおの指で底から支え挟む様に持つ。もう一方の手は茶碗に添える様に持つ。今回ワークショップに参加した障がい者の中には、この持ち方は見られなかったが、私自身がこの形状の茶碗を持つ時にはこの様な持ち方になる。この茶碗は、横から見ると半円の形となる。

順が変わるが「掴む形」「載せる(挟む)形」「包む形」の順に、鈴木大拙は禅画「○△□」(The Universe) にちなんで、名を「○△□(まるさんかくしかく)茶碗」〈写真1・24〉とした。



〈写真29〉 掴む形

5. 茶碗開発プロジェクトで制作した茶碗のデータと考察

茶碗開発プロジェクトでは、〈表1〉にある18個の茶碗を制作した。A～Dはワークショップで障がい者が自ら制作したもの。1～18が茶会の為に制作した茶碗である。△6、□11、○18は「○△□(まるさんかくしかく)茶碗」である。

この一覧では、茶碗の真横からと斜め上の写真画像、その寸法と重量を整理した。

釉薬に関して補足しておきたい。釉薬は、淡緑チタン結晶釉、均窯釉、朱鷺色志野釉、空砂釉、天目釉、鉄茶釉、アメ釉の7種を使用した。表面に現れる色味や質感の妙を見た目のバリエーションの広さ

で選定したが、今回は手触りの差を意識して釉薬を選定した。各釉薬を表面の滑らかさで表現すると、ザラザラ→サラサラ→ツルツルの様になる。

		口径 (mm)	高台径 (mm)	高さ (mm)	高台高 (mm)	重さ (g)	釉薬
A		160	65	67	10	559	淡緑チタン結晶釉
B		155	65	70	7	631	空砂釉
C		95	62	75	8	356	朱鷺色志野釉
D		120	80	83	15	544	朱鷺色志野釉
1		112	60	83	5	330	朱鷺色志野釉
2		100	60	85	5	296	均窯釉
3		110	65	93	3	367	均窯釉
4		108	65	88	7	359	天目釉
5		100	60	63	5	278	天目釉
△ 6		147	57	68	11	310	朱鷺色志野釉
7		152	55	71	12	302	均窯釉
8		147	56	67	10	269	均窯釉
9		146	62	64	11	317	淡緑チタン結晶釉
10		143	61	71	11	363	鉄茶釉
○ 11		135	60	85	10	364	均窯釉
12		160	60	78	12	364	均窯釉
13		148	58	65	10	251	薪窯焼成
14		152	60	72	10	355	淡緑チタン結晶釉
15		120	70	75	7	397	朱鷺色
16		132	66	70	8	377	鉄茶釉
17		138	65	66	8	323	均窯釉
□ 18		111	60	85	5	330	天目釉

〈表1〉 制作した茶碗の寸法データ

ザラザラ	サラサラ	ツルツルでデコボコ	ツルツル
	淡緑チタン結晶釉	朱鷺色志野釉	均窯釉
空砂釉	鉄茶釉		天目釉
			アメ釉

〈表2〉 釉薬の表面の滑らかさ

今回、これらを数値的に客観視出来る指標を持ち得ていない。感覚的で抽象的な表現ではあるが、順に並べておく。

〈表2〉の補足であるが、空砂釉は釉薬に細かな

砂が混入されており、焼成後も砂の粒が表面に現れサンドペーパーの様にザラザラした質感になる。

淡緑チタン結晶釉と鉄茶釉は、表面がマット状で光沢が抑えられた表面で、触るとサラサラした印象を受ける。

朱鷺色志野釉は、光沢がありツルツルした質感であるが、釉薬の厚みが不規則に現れ、デコボコした手触りを指先に受ける。

ツルツルに分類している3種の釉薬は、釉薬がしっとりとして解けガラスの表面の様に非常に滑らかで表面に光沢を生じ、周辺の光等もよく映り込む。

この茶碗の肌触りに関しては、茶碗のお披露目の機会に茶碗の形状だけでなく聞き取りを行っている。

参加者は頸椎損傷と視覚に障害のある方に分かれるが、頸椎に損傷を追われた方は、手を握る動作が難しいと同時に、手がカサカサ乾燥するという一方で、ツルツルに分類する釉薬は不安を感じるということであった。頸椎損傷の影響で手のひらの発汗作用等が上手く機能しないらしい。

視覚に障害のある方も同様にツルツルに分類する釉薬に関しては不安を持たれた。

一同、同じ様な印象を持たれていたが、サラサラでボコボコに分類される朱鷺色志野釉とザラザラの空砂釉の評価が高かった。

以上、釉薬に関する整理であるが、釉薬は様々な種類がある。焼成方法や温度によってもその調子に変化する為、一概に数値化することは難しいが、ある程度の指標を見ることが出来た。

## 6. まとめ

今回、○△□茶会の為の茶碗制作、茶碗開発プロジェクトを進め、着地点を定めずまま模索することの中で、ようやく一つの着地地点にたどり着いた。

茶碗そのものについて、まとめたい。

茶碗は、○△□茶碗と銘打ったものに集約し、手と茶碗の関わりについて考えた。手がどの様なものを持つのか、器を作る中で整理することが出来た。

釉薬についても手触りを基に障がい者の視点でどのように感じるのかを共に見ながら探求することが出来た。

しかしながら、工芸的な焼き物の造形的な形状や手触り、また釉薬がもたらす色彩、絵付け等の加飾技法を用いると、これは整理出来ない程多様な表現を持つ。

重さに関しても、楽焼等低温で焼かれる焼き物は高温で焼成される焼き物よりも密度が低く軽い。手で持った印象もまた大きく変わる。

これらを全て考慮に入れ、ユニバーサルな茶碗を意図することは困難である。しかし、本論の中で触れた幾つかの視点は次の進むべき方向への道標になるのではないだろうか？

今回、障がい者と共にUDIのスタッフも共にワークショップを行い、それぞれが自らの手で関われることを、それぞれに考えて形にし、茶会を実現出来たことの意味は大きい。

茶道で用いる茶碗は、プロダクト製品ではない。画一的に皆が同じものを持つことが目的ではなく、茶会のテーマに挙げられていた「多様性と共生」が目的だとすれば、今回の取り組みは抽象的な結果ではあるが、今後続く面白い取り組みになったと考える。

課題を上げれば、多くの課題が浮かび上がるが、今回は、機能的な視点で、ユニバーサルな茶碗を志向して来た。茶会とは、機能だけを追求する場ではない。いわゆる茶道の中では点前や作法にのっとり、型の中で考えるべきものもあるが、プロセスとしてこれらに関わる人達がいるのであるならば、彼らがより生き生きと表現出来る茶碗というのも一つのテーマではないかと、茶会を終えた後に振り返った。

「掴む形」「載せる（挟む）形」「包む形」、すなわち「○△□（まるさんかくしかく）茶碗」に集約出来たことは一つの成果ではあるが、鈴木大拙の「○△□」（The Universe）に導かれた様な不思議な思いがある。

大拙の禅画「○△□」（The Universe）を改めて見

るとき、○も△も□も宇宙の一部の様に感じた。私自身、大拙の仏教哲学に精通している訳でも何もない。しかし、そこに描かれていた○△□は様々な大きな意味を含みながら創造的に描かれている様に見える。

ユニバーサルデザインとはなんだろうか？多様性と共生とは？造形の中で自問自答が始まる。

今後も、私なりの○△□を考えてゆきたいと思う。

### 謝辞

今回、茶碗開発プロジェクトを通して「○△□茶会」ユニバーサル茶会に関わらせて頂いた。

これは、これまで私が自身の制作に対するものの見方と一見違う、新たな角度から様々なものを体験し学ぶ場となった。

この企画全体を担って頂いたUDIのスタッフの方々、一緒に茶碗づくりを進めて頂いた障がい者の方々、茶会の運営に関わって頂いた方々、その他にも様々な方との繋がりをこの場で頂けたこと、新たに私の中に取り組みべき何かを見い出すきっかけになったこと。

ここに感謝の意を示し、御礼申し上げます。

### データ

○△□茶会（金沢21世紀工芸祭 金沢みらい茶会）

主催：金沢創造都市推進委員会、金沢市

場所：鈴木大拙館（金沢市）

日時：2017年10月22日（日）

第1席 18：00～19：20 第2席 19：00～20：20

企画：一般社団法人ユニバーサルデザインいしかわ

監修：荒井 利春（UDいしかわ理こと長）

手前：奈良 宗久（茶道裏千家 今日庵業躰）

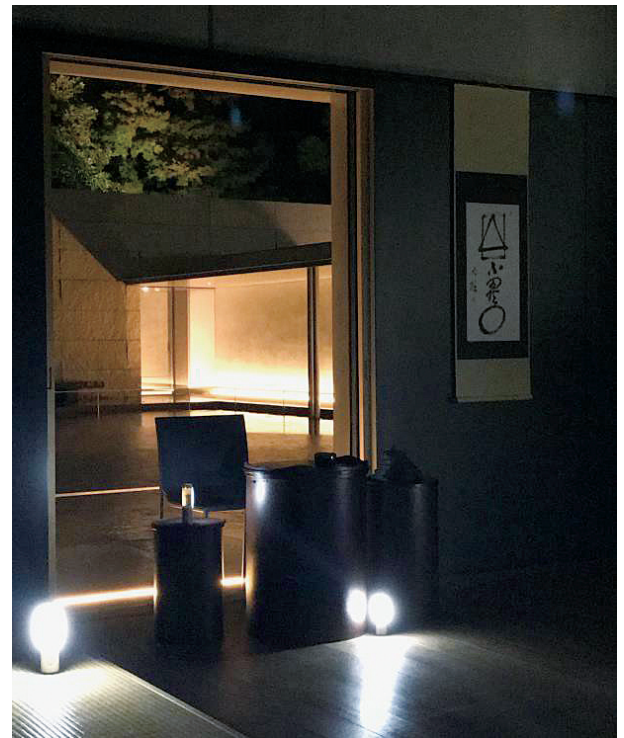
主催：金沢創造都市推進委員会、金沢市

### 参考文献

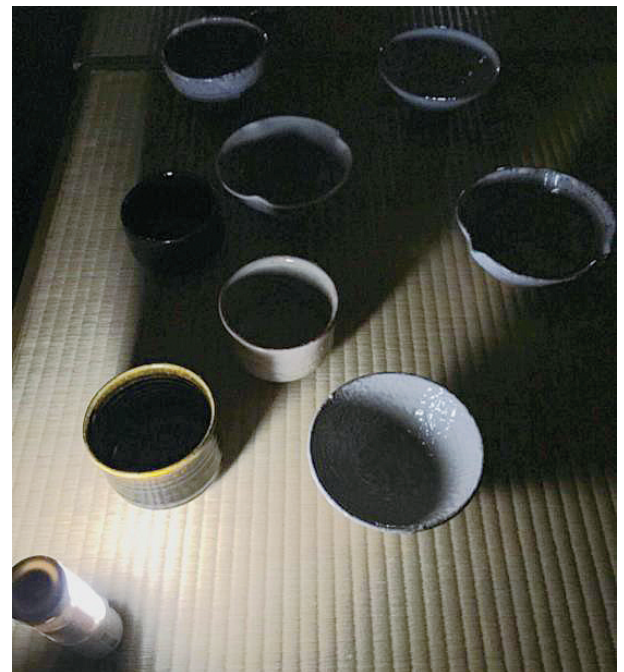
金沢美術工芸大学文化振興財団・鈴木大拙館ホームページ・  
<http://www.kanazawa-museum.jp/daisetz/index.html> (2018.11.6)

一般社団法人ユニバーサルデザインいしかわ・UDI  
 ホームページ活動実績・

<http://ud-ishikawa.com/archives/> (2018.11.6)



〈写真30〉茶会の会場風景



〈写真31〉茶会で用いた茶碗



〈写真32〉〇△（まるさんかくしかく）茶碗 斜め上から



〈写真33〉茶会のイメージ写真

（いけだ・しょういち 工芸専攻／陶磁）  
（2018年11月7日 受理）